



第19号

2014.3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団

〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64

事務局 日本赤十字社広島県支部

TEL (082) 545-5011

平成二十五年全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会総会（報告）

委員長 日高敬司

平成二十五年七月四・五日、日本赤十字社本社において、全国四十七都道府県委員長、日赤本社関係者六十余名が参加して開催されました。

第一日

一 開会式、写真撮影

二 総会

①平成二十四年度事業・会計・監査報告

②役員改選

③平成二十五年度事業計画・予算案

④創立五十周年記念事業（平成二十六年）

三 ブロック会協議（第五、中国・四国ブロック）

①防災教育について

防災への意識化、学校・家庭・地域の一体化

②賛助奉仕団の活性化

団員の研修会、講師団の結成

③指導者協議会との連携

合同研修会、サポート体制

④賛助奉仕団員の加盟校促進に果す役割

第二日

一 東日本大震災における被災三県（福島・宮城・岩手）の報告

赤十字奉仕団と青少年赤十字少年赤十字の愛と絆の記録

二 鹿児島県賛助奉仕団による支援事業

団員が「紅さつま」を植え付け、六〇〇キロワを福島市の子どもに送呈するまでの報告

三 ブロック会報告

四 全体討議

五 閉会式

平成二十五年中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会（報告）

今年度は本県が開催県ということで、日赤県支部の多大のご協力と団員の皆様のお陰で準備も万端整え、他県の皆様をお迎えすることができました。今回のコンセプトは「広島らしさ」を全面に、第一は、原爆投下後多大の医薬品を送り届けていただいたジュノー博士のアニメの上映と顕彰碑見学。第二は、血液センター（中国・四国ブロック血液センター）の見学。第三は最終日の昼食時の「お好み村」への案内でした。

第一日

一日時 十月三日（木）十三時三十分

二 会場 広島市文化交流会館

三 参加者 県外十六名、県内十五名

四 開会 挨拶

・中四国ブロック協議会長 福原則昭

・広島県賛助奉仕団委員長 日高敬司

・日本赤十字社広島県支部事務局長 桂木弘二



五 アニメ映画「マルセル・ジュノー」上映

（解説 広島県賛助奉仕団副委員長 山中章敬）
実践報告

「人道的完成を培い、思いやりの心を育む」

広島市立吉島中学校 田村真一先生（内容は別記）



2 賛助奉仕団の活性化について

① 団員（会員）の研修会について

（各県とも総会と併せた研修会や、赤十字奉仕団・指導者研修会等の研修会に積極的に参加している）

② 他奉仕団（地域・特殊奉仕団）との連携について

③ 加入促進について

3 指導者協議会との連携について

① 合同研修会・研究会について

② 指導者協議会へのサポートについて

③ トレセンへの協力・トレセンのあり方について

④ 青少年赤十字加盟校へのサポートについて

★愛媛県の平松清一委員長が県内の学校に「いとすぎ」の植樹を通して児童生徒に赤十字の意味と環境を訴え大きな成果を上げられていることに共感して、本ブロックを今後名称「いとすぎ会」とし、いとすぎ植樹の推進を誓った。

八 懇親会

余興として水内神楽団による神楽上演

（神楽団員の中にJRC指導者が在籍）

第二日

マルセル・ジュノー博士顕彰碑見学

（案内 広島県賛助奉仕団副委員長 山中章敬）



二 中国・四国ブロック赤十字血液センター見学



（実践報告）

HUMANITYとともに

広島市立吉島中学校 田村真一

加盟校である吉島中学校に着任したとき、最初に目に映った光景、それは校門付近で募金活動に勤しむ生徒の姿だった。聞けば、この『一円玉募金』が唯一のJRC活動とのこと。校長室で「JRCをしつかりやって下さい」とお声掛けを頂いたのが、現指導者協議会長の藤川先生。六年前に遡るうら暖かな春の、いまとなつては懐かしい一幕である。

翌年、早速広島県のJRC研究指定校を申請（ここに辿り着く迄には、相当数の苦労があった）これを皮切りに、校内にJRCが大きく浸透し始める。研究主題は、主に次の二点に集約設定した。

① JRC活動推進

② EHL（国際人道法学習プログラム）の導入

前者は、本校JRCのそもそのニーズから、そして後者に対しては、JRC活動の本来的意義である

七

協議会（次の項目を事前に回答していただき重要点の報告・協議を行った）

1 各県の防災教育の現状について（東日本大震災の教材化）

（愛媛県では、江戸時代津波から守った和歌山県の史実をもとに「稲むらの火」として教材化し、学校で使用している）

① 賛助奉仕団としての防災教育について

② 各県支部が行っている防災教育について

③ 各県教育委員会の動き

④ 県内他の赤十字奉仕団の活躍

⑤ 地域ネットワークの動きについて

「人道的価値観」の醸成という希いを、韌く込め導き出した。

やがて学校経営目標の中に「JRC活動推進」の文言が盛り込まれ、吉島JRC黎明期が始動。新たに『JRC掲示板』を三カ所、そして学年毎の『VS掲示板』を設置、校内随所に「HUMANITY」と「気づき、考え、実行する」の文字掲示が溢れかえる。総合的学習の時間での、所謂「健康・安全」諸プログラムの展開、そして全校集会や広報誌等によるJRCの発信、「VS掲示板」を介しての各種VSの高揚・実践等、JRCそのものが、次第に大きな位置を占め始め、少しずつ他校の活動域に近づいていく。日韓交流事業等、JRCネットワークを活用した諸活動（JRCトレセン、JRC県大会。NHK海外たすけあい、広島フライーフエスティバルパレード、国際交流プログラム等）には、可能な限り生徒に参加機会を創出した。活動の拡がりに呼応し、指導者数も次第に増加していった。

「EHL」導入は、私の着任2年目のシーズンに始まる。当時、一年生全クラスをスタート学年として、ICRC（赤十字国際委員会）の手によるこの学習プログラムを、道徳教材（一部学級活動）としてカリキュラムに組み込み展開実施した。

ねらいは、「人道法の（事例）探求」それ自体が、生徒の人道的感性に直接訴えかけていくその効用にある。「人間の尊厳とは何か」と問い、内外の事例の中に「命」と「尊厳」の於かっている状況を鋭く見抜き、考察を重ね、人道的価値観構築の足掛かりとなる「視点を自ら探りあて掘み取らせていく。応用プロセスでは「傷つき損なわれた「尊厳」」をどう回復し取り戻していくか、「傷ついた人々」に対して、どのような支援が必要かという考察に移行する。文字通り「HUMANITY」実現の考察そのものを積み上げていくわけである。生徒たちは（場合によっては教師も）常に「HUMANITY」と真正面から向き合っていかなければならない。「EHL」の徹底実施を通じて、私は過去遭遇したことのない成果（生徒、とりわけリーダー層

の変容）の数々を目の当たりにする。

「命」と「尊厳」を、「HUMANITY」の尺度として探求を推し進める「EHL」。それは、生徒の言語認識の変遷として、その最初の兆候を露わにしてくれた。生徒作文や各種感想文に、ときに生徒自身の会話の端々に、「命」と「尊厳」、この文言が見え始め、とりわけ、生徒会リーダーたちは、自身の挨拶文や演説等に、ごく普通に常用して観せた。EHLに限らず、「HUMANITY」の定義づけ・理解を疎かにしたのでは、JRC活動としては不十分であるという、これ迄の私のジレンマに対する、見事な迄もの解答例がこうして具現化された。

吉島中学校で施した（或いは今なお実践を重ねている）JRC活動推進の六年間を鳥瞰し、今日の成果（無論課題も）を振り返る度に、私たち指導者にあてがわれた幾つかの偶然（幸運と称するべきか）に負う部分が少なからず介在していたことを最後に記しておきたい（管理職の先生を含む）良き教師仲間を得られたこと。

それは、何物にも代え難い力となり、気力の充実・継続に繋がる。学校は、もとより組織で動くもの。周囲の理解にいかにか漕ぎ着けるかがやはり最初の鍵となる。次に、良き生徒たち（特に新入生たち）。「EHL」授業を通じて、熱い想いと共感を寄せ、「HUMANITY」に対する驚異的な理解度を示してくれた、とりわけ（秀でた感性に恵まれた）リーダー生徒たち。彼（彼女）等こそ、本校JRC推進の真の立役者であり、偉大な牽引者でもあった。多くの活動では常に先頭に立ち、自らの言葉で「HUMANITY」を熱く語り（生徒総会・生徒集会）、時に大人たちや教師の前でさえ（研究発表会）自らの想いを吐露せしめた。こうした凄まじい成長の軌跡に出遭えたことが、私には最も大きい指導体験となった。

最後は、やはり日赤サイドの支えである。「EHL」について並々ならぬ関心と深い造詣を持ち、JRCの現在・未来（先端）を常に見極め、指導者層の想い・希いに精一杯応え支援頂ける、私の吉島中学校着任時の

支部支援体制とは、まさに国内でも有数のレベルのものであったと回想する。

振り向けばいつも傍らに「HUMANITY」の言葉があった。人が代わり時代が移ろいゆく潮流の中で、本校が今後どのような熟成を遂げていくのか、関心は尽きない。

「人道を 幻夢みし集ふ 春の宵」

（中国・四国ブロック研修会で発表していただきました。）

平成二十五年度青少年赤十字賛助奉仕団総会（報告）

幹事 采谷宣子

今年の総会は、中四国ブロック大会が本県で開催されるため、九月二十六日に開催いたしました。

- 一 事業及び会計報告について
- ・ 昨年度の事業及び会計報告が承認され、本年度の事業計画及び予算が決定しました。
- ・ 本年度退団者一名、ご逝去者三名（別記計報連絡）の報告

- 二 本年度団費請求について

四十三名に団費請求、昨年度未納者十一名。

- 三 中四国ブロック賛助奉仕団研修会について

この研修会への費用として十万円支出することとした。また日程、予算計画、役割分担などを審議した。

- 四 その他

「いとすぎの種を育てる」活動を推進することとした。

平成二十五年度青少年赤十字トレ－ニングセンター（報告）

今年度のトレセンは次のとおり行われました。期日・会場は各校種同一で行われました。

- ・期日 平成二五年八月一八～二〇日
- ・会場 広島市似島臨海少年自然の家

- 一 小学校
 - ・参加校数 四校
 - ・参加児童数 一五名
 - ・⑤スタッフ 一八名
 - ・賛助奉仕団スタッフ 一名
(河戸靖子)



- 二 中学校
 - ・参加校数 九校
 - ・参加生徒数 三二名
 - ・スタッフ 一九名

- ・賛助奉仕団スタッフ 一名
(山中章敬)



- 三 高等学校
 - ・参加校数 四校
 - ・参加生徒数 一六名
 - ・スタッフ 八名
 - ・賛助奉仕団スタッフ 二名
(日高敬司、野田崇)

平成二十五年度青少年赤十字広島県大会（報告）

毎年行われているこの大会に今年度も団員多数参加し、児童・生徒の活躍を見て、若さが甦った気持ちになりました。分科会では昔所属した校種に従い生徒と共に体験しました。

- 一 期日 平成二五年十一月二日（土）
- 二 会場 広島市立国泰寺中学校
- 三 内容

- 1 開会式、永年加盟校表彰、加盟校活動紹介



ひかり幼稚園

- 2 体験発表

- （広島・韓国青少年赤十字相互交流事業派遣団）

- 3 分科会
- ①小学校「防災すごろく」



- ②中学校「クロスロード」「地球授業」
- ③高等学校「グループワーク 危機からの脱出」

平成二十五年度広島県赤十字ボランティア研修会（報告）

他の赤十字奉仕団との交流と団員の研修を深めるため、団員四名が参加しました。

- 一日時 平成二十六年二月十四日一〇時～十六時
- 二 会場 日赤県支部会議室
- 三 内容

- 1 講義「赤十字と奉仕団」
（本奉仕団副委員長 河戸靖子）
- 2 ハイゼックスによる炊き出し体験及び昼食



- 3 グループワーク（防災すごろく）
- 4 日赤県支部の防災ボランティア体制
- 5 レクレーション講義・体験

「青少年赤十字展」に想う

顧問 横田三郎

『JRCと地域赤十字奉仕団等との提携・協働によって、地域における赤十字活動の充実に寄与したい。』

地域における赤十字活動の充実・進展を図るためには、青少年赤十字の活動が基礎的な役割を担うのではないかと思惟するからです。こうした想いによって、平成二十年度から三年間、東広島市赤十字奉仕団が「モデル赤十字奉仕団」としての指定を受け、「東広島市における青少年赤十字奉仕団に協働態勢の構築」をテーマに活動しました。

「赤十字ボランティア基礎研修会」を実施、引き続いて、西条農業高校・黒瀬高校のJRC部員の参加を得て、当奉仕団分団の東広島市赤十字ヤングボランティアとともに「東広島市青少年赤十字展」を開催、更には賀茂高校の生徒会執行部等の参加を得て「東広島市青少年赤十字研修会」を行い、研修とともにボーリングにより交歓することもできました。

その後、青少年赤十字団員が減少し、ヤングボランティアは廃止、青少年赤十字との協働態勢構築への活動も残念ながら中断することとなりました。しかし、平成二十三年度から広島県青少年赤十字賛助奉仕団の協力のもと「東広島市青少年赤十字展」を開催することができるとなり、今年度も、十一月二・三日の両日、東広島市生涯学習フェスティバルに参加して実施しました。

当日の主な展示は、東広島市立造賀小学校の「防災教育に取り組んでいる四年生十三名が作成した新聞」、広島県立広島中・高等学校の「東日本大震災義援金の募集活動」「地域清掃活動」、広島県立西条農業高等学校の「献血教室に学ぶ生徒たち」「広島県献血ボスター最優秀作・梶原彩希さん」、広島県立広島中学校二年・宗條薫さんの「トレセンで学んだこと（感想文）」等でした。

展示のほか「JRC加盟校の紹介」「赤十字奉仕団の紹介（赤十字関係DVD放映）」「献血関係等の資料配付」等も行いました。

当日の参加者 十一月二日 九、八〇〇名、三日 一二、九〇〇名、合計 二二、七〇〇名でした。

この度の「青少年赤十字展」の実施に当たっては、東広島市教育委員会、日本赤十字社広島県支部・同東広島市地区（東広島市社会福祉課）、広島県赤十字血液センター等から、学校への周知資料提供等々ご協力をいただきましたことをありがたく心から感謝いたします。ここに記して厚くお礼申し上げます。

今後とも、JRC加盟校が赤十字奉仕団とともに、地域の市民の方々と関係諸機関・団体等と連携し、共同して活動することにより、赤十字活動の充実と青少年赤十字の健全育成に寄与できるように努めていきたいものと考えています。

平成二十五年（二〇一三）全国高等学校総合文化祭・JRC・ボランティア部門大会（長崎県・五島市福江）参加報告

副委員長 野田 崇

去る七月三十一日から八月二日まで開催されたこの大会に参加したので報告します。

昨年開催された、「二〇一三 長崎しおかぜ総文祭・JRC・ボランティア部門大会（兼JRC高校トトレセン）」（長崎県五島市三井楽町で八月六日～八日）において、プログラムの中で「ボランティア活動の楽しさ」をテーマに講演を依頼され、五島に赴きました。講演だけでなく、二泊三日のプログラムを共にすることとでグループワークの展開や「気づき・考える・実行する」実践目標とプログラムとの相関性について議論したスタッフの先生方との再会と、参加した生徒の成

長を楽しみに、すこし費用がかかりましたが、日程調整が付いたので参加してきました。

参加者は、青森から沖縄まで二四県 生徒約一二〇名・引率約五〇名(長崎県はJRC・インターアクトなどクラブ活動をする学校が全て参加していた。また五島高校の生徒・教師がスタッフとして多数参加していた)主催県の参加者が三分の二以上であった。広島からは、宮島工業高校の近藤先生と私が視察者として参加しました。

第一日(七月三十一日)

一四・〇〇 長崎しおかぜ総合文化祭(以下総文祭) JRC・ボランティア部門大会がはじまりました。

開会式では、JRC・ボランティア部門会長(五島高校校長)、生徒実行委員長(長崎商高3年)、福江市長等の歓迎挨拶があり、イベントとして五島高校生徒による、「ヘトマト」(福江市の伝統芸能・県無形文化財)が披露されました。

記念講演は、関塚美恵さん(国際看護師・名古屋第二赤十字病院)が行い、世界の災害・紛争など赤十字を必要とする現状と課題を高校生に訴えました。

二〇・三〇 市内のホテルに集合して、第二日に行われるワールドワーク(以下FW)の打ち合せと仲間づくりが行われました。グループ編成を次の①世界遺産を目指す五島教会群の歴史と課題、②伝統芸能・県無形文化財「ヘトマト」の歴史と課題、③五島の椿と自然、④万葉の里三井楽町・国境の海岸漂流物から学ぶ国際理解と町おこし、以上四グループ編成で実施することが決まりました。初めての出会いから、実行委員会の生徒による、コミュニケーション・レクレーション・仲間づくり、FW視点の確認・打ち合せに瞬く間に予定の二時間が過ぎました。

第二日(八月一日)

九・〇〇 各県の研究発表が行われ、それぞれ工夫したプレゼンテーションでした。とくに、福島県の磐

城第一高等学校の発表は、クラブ活動の報告とTCにおける「三・一一東日本大震災福島支援感謝のプレゼンビデオ制作」を披露して、完成度の高い発表でした。一二・三〇 四グループに分かれFWに発表しました。私は①世界遺産を目指す五島教会群の歴史と課題グループに同行し、五島教会群を巡った。江戸末期から明治にかけて建てられた教会群は、明治維新の混乱もあつて殉教と弾圧の歴史の中にあつたことを知りました。

一九・〇〇 FWから帰った四グループは、翌日の発表に向けグループワークを行いました。

第三日(八月二日)

九・〇〇 JRC・ボランティア部門大会作品・活動展示会場の、五島市福江文化会館においてFW発表会が開かれました。FWの四グループとも高校生の感性で歴史と課題を掘り下げ、出会って三日目とは思えないグループワークを発揮して発表をしました。

閉会式で、研究発表優秀校が披露表彰され、福島県磐城第一高等学校が最優秀賞表彰されました。表彰式後 来年度、総文祭・JRC・ボランティア部門大会を開催する茨城県が、PRと挨拶をされました。

最後に、日赤長崎県支部事務局長が三日間の講評を行い、大会を終りました。

この総合文化祭は、二〇一四・茨城大会、二〇一五・滋賀大会、二〇一六・広島大会の順は決まっています。

なお、広島県高校指導者協議会は、JRC・ボランティア部門大会を引き受けることを決定し、宮島工業高校を会長校とし大会の準備に入りました。

二〇一五・滋賀大会では、JRC・ボランティア部門を開催しないとなっていますので、二〇一四茨城大会に視察団を派遣することが必要です。JRC賛助奉仕団としても、支援体制を構築する必要があります。

(実践報告)

熊野町赤十字祭り

〜幼小中高生が共に楽しく〜

顧問(社会福祉法人光生会 理事長)

光本凉子

先人の力に導かれて加盟の歴史は古い。現在九十歳の古老は、「わしも此のマークを付けて第二小学校に通っておったよ。活動は何をしたか、よう覚えてはあらんかのう」と語る。昭和十年頃かと推察する。幼少期に養われた奉仕の教育力は偉大で、今もなお元気で活動を創造し地域福祉リーダーとして三十四年間活動中である。園児も「子ども赤十字加盟(昭和五十六年)」以来、青少年赤十字フェルト製マークを胸に付け元気よく毎日通園している。

JRC活動充実を願う町社会福祉協議会(以下町社協)に働きかけ、町人口約二万五千人、高校一校、中学校二校、小学校四校の全校と保育園三園が加盟している。唯一の高校である熊野高校は創立当初の加盟であろうか。保育園との交流活動は多く長く続いている。その間小学校二校はJRCを踏まえた公開教育研究発表会も開催している。トレセン参加生徒へは二ヶ年間寄付金で貴重な体験を積ませた。以後、町社協にお願いしたところ予算化され、町内赤十字祭りが誕生した。日本赤十字社県支部の支援を受けて年に一度のお祭りを開催している。町長・教育長を来賓に迎え、広い町民会館で、中高生をリーダーとし小学生・幼児、保護者が集合し活動報告、車椅子体験、点字器習得等を実施している。昼食には、災害時炊き出し体験、日赤県支部より人的支援、食材提供、大型炊飯器まで持ち込みいただき全員がごちそうになる。

今年で赤十字祭りも第七回を迎えた。参加者を十五班に縦割り、中学生が幼児の手を握りワールドワークに挑戦した。その様は、人間愛にあふれ、優しい声

かけに幼児も共に行動。明るい声に満ち有意義な一日を過ごした。六回より有志女性会も調理応援。奉仕団に発展するとの声も聞く。ここまで暖かく育てていただいた町内外JRC指導者各位、町内諸先生方、保育士の労に感謝し、継続発展することを願っている。

(会員たより)

幼児の心に赤十字の愛の種を マルセル・ジュノー博士顕彰碑 を訪ねて

副委員長 大木昭

毎年八月六日の平和記念式典前の広島は平和記念公園を訪ねる多くの小中高校生のグループを見かける。白木地区の保育園も毎年平和教育の一環として八月二日酷暑の中を平和記念公園の慰霊碑めぐりを実施している。五年前に青少年赤十字に登録してから、賛助奉仕団の一員として碑めぐりに同行させてもらっている。本年は広島市の恩人マルセル・ジュノー博士の顕彰碑をプログラムに入れてもらった。

県支部のスタッフの説明を熱心に聞いていたが理解は難しかったことはいうまでもないが、成長の襞に体験として刻み込んで置くことは人格形成上有意義だと思う。

この度慰霊碑めぐりに参加した子は「あれを見たよ」と話しかけてくれる。意味は分からずとも感覚的な体験をしつかりさせることが大切だと思う。何時の日にか赤十字の優しさを持った芽をふくと思う。

青少年赤十字の灯火を守る人々

副委員長 河戸靖子



昨年の夏、この日は庄原市比和町三河内地区では、福山の小学五年生約六十名を登山、牧畜、農業等の里山農業体験を実施していた。最後の夜のキャンプファイヤーという夕方になって突然の雷雨が襲った。雨は止んでも会場の旧三河内小学校グラウンドは水浸しとなった。本部役員の奥田さんを中心とする大人のスタッフは別の計画を考え始めていた。

「ファイヤーは楽しいよ。ぼくらは近所のおばさん達も最後の夜で楽しみだった。よし！やるか。」と立ち上がったのは三日間ボランティアをしていた地元の中・高・高校生五人だった。彼らは自宅からバスやオルやバケツを持ち寄り、何とグラウンドの雨水を絞り取り始め、ファイヤーができるまで会場の水を拭き取った。これにはスタッフの大人や福山の小学校の先生や児童も驚いた。後日児童の感想文にもこの感動がたくさん書かれていたことからも言える。

最終日に私はこの企画の一コマの講師に招かれており、会場を訪れたところファイヤーの余韻の残る火どこの灰を片付けているところを見ただけである。しかし、グラウンドの水を拭き取ったという生徒のVSを知ったのは半年も後のことであった。

実はこの中・高・高校生は以前青少年赤十字加盟校の三河内小学校の児童で、私はこの学校にJRCのボランティアで伺っていた。また、県トレーニグセンターのスタッフでもあったので、彼らを最終日に自宅まで送り届けたこともありよく知っている生徒であった。その生徒たちが自らの意思でファイヤーの成功のためにグラウンドの水を拭き取るというVSを行ったのである。

この里山体験には他にも感動がある。三日間の活動で福山から来た児童は、地区の家庭に客としてではなく家族として迎えられ、薪割り、炊事、牛の世話など暮らしを共にして絆を深め、別れの時は家族と抱き合って別れを惜しんだ。

こうした肌の触れあう体験の中から次のようなこともあった。不登校傾向のある児童も参加していたが、「帰宅後は毎日登校するようになった」と保護者や学校長からお礼の電話が寄せられたということだ。

なぜ、三河内地区にはこのような児童も大人も感動するノウハウがあるのだろうか調べてみた。

地区のとりまとめをされている奥田さんに聞くと、受け入れ事業の民泊に立候補された方が「以前、海の鹿島小学校と山の三河内小学校の児童が青少年赤十字活動の一環としてお互いに宿泊を伴った交流をしたのを思い出した。鹿島の子どもは冬にきてスキーや雪だるまを作ったりして楽しんだ。逆にこの子どもは夏に鹿島に泊めてもらい、地引網を引かせてもらった。自分たちも家族ぐるみで付き合い大変楽しかった。また、やろう」ということで引き受けていただいた。それが現在六年目になるという。

この二校の交流の歴史を調べてみた。昭和四十九年

に青少年赤十字の姉妹校となり、冬、鹿島小学校の五年生と保護者・教職員が来校し、夏、鹿島小学校を訪問するという地域全体を含めた交流が鹿島小学校が廃校になるまで二十九回も続いた。その後も地域の交流は続き、平成十四年三月三河内小学校の休校式典には鹿島小学校の高尾元校長先生が来校され、「青少年赤十字の活動を目的とした交流は素晴らしい」と思いう出を語っておられる。三河内小学校の休校後も奥田さんは「その後も鹿島を訪ねると地域の方々が迎えてくださり保護者同士の交流が続いた」と懐かしそうに語ってくださった。

また、鹿島の児童にスキーを指導した進藤さん（現比和自然科学館長）は、「鹿島の子どもは雪が珍しく大喜びで、その子どもたちに三河内の子どもたちが優しくスキーを教えていた」と話された。奇しくも今回福山の児童にキャンプファイヤーを指導した森繁さんは、鹿島小学校との第一回の交流会に児童として夏の鹿島小学校に海体験参加した方であった。

このように青少年赤十字の精神を受け継いだ子どもたちも成人して地域のリーダーとなり、月日は流れても脈々とJRCの灯を胸にともし続けていくくださることに感動を覚える次第である。



（お手伝いした中・高校生）

平成二十五年青少年赤十字加盟概況（加盟校数・加盟率）

青少年赤十字加盟校数		
（単位：園、所、校）		
校種	全国	広島県
幼稚園	800	8
保育園	723	44
小学校	6,541	174
中学校	3,191	105
高等学校	1,840	56
特別支援校	99	6
合計	13,194	393

青少年赤十字加盟率（幼稚園、保育園は学校数から除く）			
	学校数(校)	加盟校数(校)	加盟率
全国	38,338	11,671	30.4%
広島県	976	341	34.9%

※学校数は文部科学省発表「平成24年度学校基本調査(確定値)」による。
 ※加盟校数は「平成24年度青少年赤十字の概況」から掲載

平成二十五年役員

顧問

委員長
副委員長

曾山 和彦 田中 晃史 塚本 幸男 平越 二郎 横田 敬司 日高 久男 射場 利久 大木 龍児 蔭山 靖子 河戸 涼子 光本 崇 野田

計報連絡

光本吉伯氏（二十五年三月）
 森田 寛氏（二十五年四月）
 池条達夫氏（二十五年七月）
 謹んでご冥福をお祈り致します。

編集後記

今年度は中四国ブロック大会を当県が担当し、準備期間中は何度も会議を開き、検討を重ねて参りました。他県の参加者から「広島らしい大変良いブロック大会だった」と評価を得ました。
 今年度に入り、計報連絡が三件、退団の申し入れが一件ありましたが、高齢化の波をはねのけて、これからも賛助奉仕団の活動に邁進したいと思っております。機関紙にも皆様の声を反映していきたいと思っておりますので、ご投稿よろしく願います。

編集委員

横田二郎、射場利久男、大木昭、蔭山龍児、曾山和彦、日高敬司、河戸靖子、采谷宣子、野田崇

